

地域における整形外科の役割， 地方における公的病院の立場より

小林 祥 悟¹⁾・内藤 信 行¹⁾・吉田 篤¹⁾
井上 邦 夫¹⁾

地域の医療活動は、住民、医師及び行政の三者が協力して初めて達成されるもので、プライマリケアに於いても我々は病院の組織である農協を通して、広報及び検診活動などに取り組んでいる。我々の整形外科が地域医療に如何なる取り組みをして来たか、外来の診療活動を通して考察してみたい。

先づ我々の新潟県厚生連魚沼病院の医療環境について説明すると、県の東南部、信濃川の下流にあり、全国でも有数の豪雪地帯である人口約4万5千人の小千谷市にあり、国鉄上越線と国道17号線が通り、農業を主体とする地方の小都市である。小千谷縮の産地、錦鯉の養殖など有名で、近年鉄工業、電子製品の生産も伸びており、漸く過疎化より脱却しようとしている。過疎化は老令化につながるもので、当市の65才以上は人口のすでに14.6%と高率で、県12.4%、国10.5%より高令化が進んでいる。

以上の農村をひかえた山間地に、163床の公的中規模病院として機能し、救急指定及び二次輪番救急病院としての責を果している。亦小千谷市より東南部の魚沼三郡と十日町市を医療圏とすると、この圏内には整形外科認定研修施設として、小千谷総合病院、県立小出病院、県立十日町病院、県立六日町病院及び当院の5施設があり、更に整形外科学会認定医の5施設と合せると10ヶ所の整形外科診療施設となる(図1)。

先づ診療活動の実態を昭和59年の外来患者からみると、当院全体の外来の1年間の患者実数は1万5千余名で、この内整形外科外来受診患者実数

は7,572名で、全体の約48%を占めている。

患者の通院圏を石原信吾氏は三つの段階の医療圏に分類し、日常生活圏、通常行動圏及び最大行動圏と区分し名付けている(表1)。日常生活圏

表1 通院圏 (石原氏による)

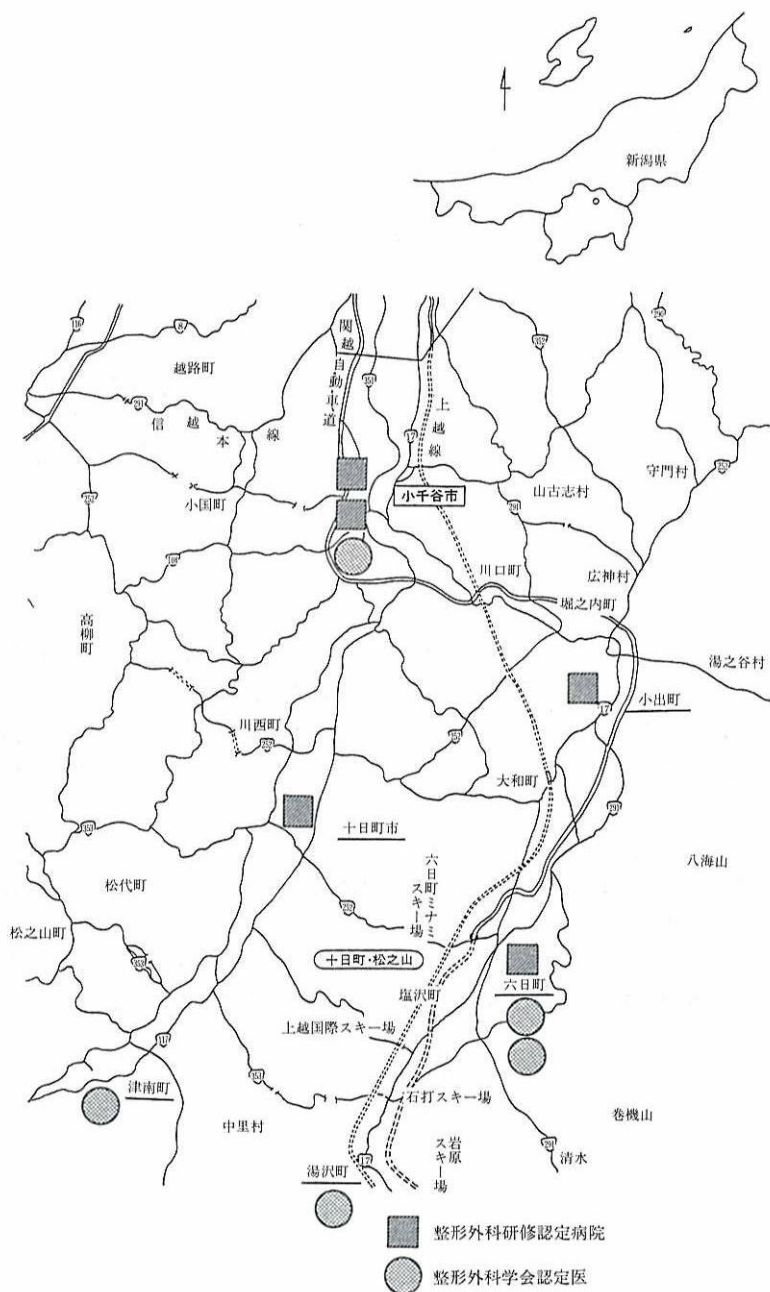
I) 日常行動圏	[59%]
日常の生活範囲で、大体歩行30分程度	
II) 通常行動圏	[37%]
乗物などを利用し、大体1時間前後迄	
III) 最大行動圏	[3%]
特別必要により、長時間かけても出かける範囲	

とは、人々が歩行で営んでいる日常の生活範囲で、大体歩行30分程度としている。次に通常行動圏とは、乗物を利用することにより可能となる生活行動範囲であって、大体乗物で1時間前後迄としている。更に最大行動圏とは、特別の必要のある場合に限って長時間かけても出かける範囲と区分している。前述の外来患者7,573名を区分すると、日常行動圏は小千谷市内の患者で、4,455名約59%と過半数を占めている。次で通常行動圏は隣接市町村で、2,822名約37%であり、最大行動圏は296名3%と少ない。この内通常及び最大行動圏の患者は約40%に達し、可成り遠隔地からの通院を示しており、これは整形外科に対する住民の認識の高さを物語っていると考えられる。

外来受診患者の性別は男性3,427名、女性4,125名で、女性が約10%多く、更に年齢構成をみる

¹⁾魚沼病院整形外科

図1 小千谷市及びその周辺図(医療圏)



性脊椎症などの加齢的疾患によって来院する患者の多い事によっている。この事はこの地域に特徴的な過疎化即ち高令化現象の一つと考えられる。

また有数の豪雪地帯であるという特殊性から、雪による災害も多発している。雪下りし中に屋根より転落しての頸髄損傷及び脊椎骨折など、また転倒による橈骨下端骨折及び大腿骨頸部骨折などが降雪時に多い。除雪作業による前腕部の腱鞘炎は、降雪が続くと多発してくる。

先天股脱の乳児検診は、当院では小児科の3ヶ月検診時にレ線写真と整形外科医の直接診察を実施しているので殆ど問題はないが、行政当局では未だ3ヶ月検診時レ線写真の撮影を行っていないので、時に年長児先天股脱をみることもある。宇都宮方式による検診の実施を行政当局に強力に要請している。

また脊椎側彎症の検診は、学校での身体検査時にチェックされ、依頼により我々が精査を行い指導しており、全く問題なく円滑に行なわれている。

施設間の連携の問題では、診療所よりの患者紹介は殆ど外傷で、骨折及び挫傷創が多く、時間外でも常に対応致しており、問題ないと考えている。

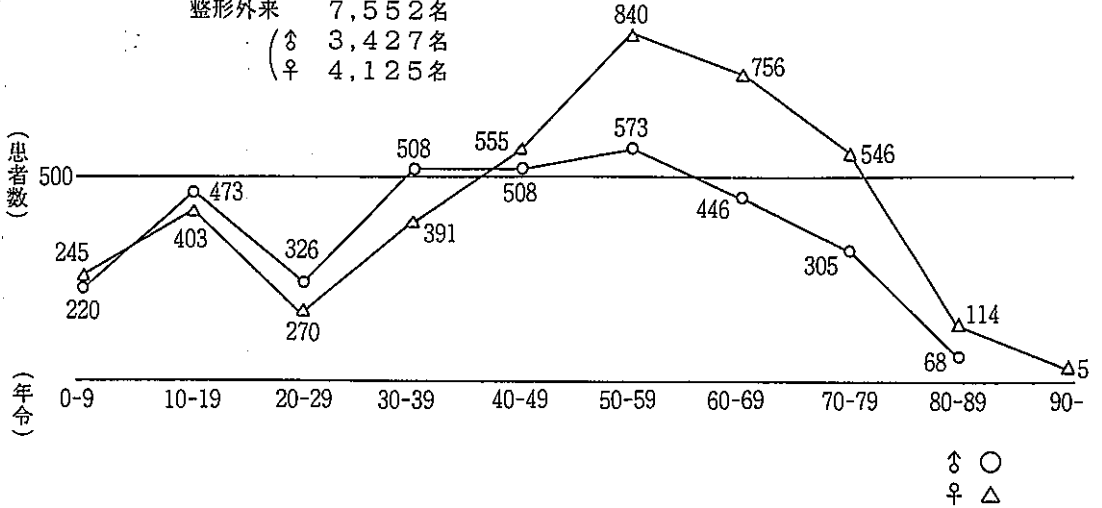
む す び

1) 過疎化即ち高令化現象が、豪雪地帯という

と、男女性共40才代迄は大差なく推移しているが、50乃至70才代になると女性患者が多くなり、この年代の男性1,324名に対しては女性は2,142名と著明に多くなっている(図2)。また女性外来患者の半数以上がこの年代に集中してくるのは、特にこの年代の女性が、変形性膝関節症及び変形

図2 性別年齢構成(昭和59年)

全外来 15,792名
 整形外来 7,552名
 (♂ 3,427名
 ♀ 4,125名)



地域特性もふまえて、年齢構成及び疾患別よりも明確に推察される。

2) 通院患者の通院圏よりみると、可成り遠隔地よりの通院が多く、整形外科に対する認識度は可成り良いと考えられる。

3) 脊椎側彎症の検診は問題ないが、先天股脱の3ヶ月検診は行政の理解が未だ不十分であり、更に強力にアプローチして行きたいと思っている。

4) 豪雪による災害も多く、屋根よりの転落に

よる頸損で死亡することもあり、最近では命綱の使用による安全策が講じられている。

5) 地域医療活動は施設間の連携が重要であり、大体円滑に連携されているものと思っている。

本稿は第59回日本整形外科学会シンポジウムに於いて発表した。

尚この発表後小千谷市では先天股脱乳児検診を宇都宮方式により実施することとなった。